

# 現代イランにおけるイスラーム言説と科学知の併存

—環境分野におけるイスラーム議論を中心に—

長崎大学多文化社会学部 阿部 哲

## 1. はじめに

イランは、イラン・イラク戦争（1980-1988）により壊滅的な打撃を被った経済を復興すべく、1990年代以降、従来の石油産業に加え、（石油）化学産業、製造業、農業を中心に積極的な投資をおこなってきた。戦後復興は「成功」とは程遠い状況であっただけでなく（吉村2005）、さらには、戦後の野心的な経済政策はイラン国内で派生的弊害も引き起こしてきた。環境問題がその一例である。とりわけ、大気汚染や水資源の確保・管理など、人々の生活に直接的に関わる環境問題が顕在化し始め、近年では、環境政策事業は政府の優先事項の一つとして位置づけられている。そのため、イランでは各界の識者が環境問題をめぐる課題の収束へ向けて議論を重ねている。

このような状況で、イランは国家のアイデンティティを固持する必要性に迫られ、様々な社会分野においてイスラーム解釈に基づいた政策が打ち出され、各方面でイスラーム教義の反映のされ方が多様化している。この流れと並行して、核開発プログラムをはじめとする科学技術プロジェクトが推進され、その成果が国家の象徴的成功例として認識されるなど、科学技術の社会的・政治的地位は向上している。このような背景において、イスラームと科学知の関係性について論じることが科学技術の発展が著しい現代イラン、広くは今日のイスラーム世界について理解を深めることに寄与するものと考えられる。本稿は、イランにおける環境問題をめぐり、とくにイスラーム的視点と西洋近代科学の視座<sup>1</sup>から交わされる議論に着目し、これらの関係性が二元論的に定義しえず、それがイラン社会の文脈に即して関係づけられてきたという点について考察するものである。

一般的に、宗教と科学知の関係は、二元論的な観点から論じられている。具体的には、イスラーム世界における近代科学の興隆は、宗教の衰退と世俗化をもたらし、科学知とイスラームは併存的というよりは、対照的で相反的であると位置づけられている。ウェーバーは、「脱魔術化（disenchantment）」という概念を用いて、西洋の合理化によってもたらされた宗教の衰退について論じている。ウェーバー（1936：33）によれば、脱魔術化とは呪術などの神秘的な力に訴える

ことなしに、欲しささえすればすべての事柄は技術や予測を通じて学び知ることができるようになったという、帰結を意味する。特定の歴史的なコンテクストにおいて発達をみた西洋的合理化は、当該地域の脱魔術化を促し、宗教などを介して形成されていた先験的な意味や価値が失われた世界、すなわち「近代」を現出させる要因となった（姜 2003；Parsons 1963）。この西洋的合理化が職業倫理へと組み込まれ、やがてプロテスタントは、経済分野のみならず、行政、政治、そして科学の分野でも合理性の概念を適用していった、とウェーバーは主張する（Weber 1963）。このことは、かつては宗教倫理や実践によって規定されていた「生の意味」や「価値」を排除するという点において、宗教と科学は相容れない関係にあるとする二元論的な概念枠組みを肯定する論点と言える（Tambiah 1990）。

イスラームと近代科学（広くは西洋文明）の関係性を扱った先行研究では、その多くがこの二元論を前提に研究がなされている。一般的にイスラーム圏は、合理化された科学知を基底に発展してきたとされる近代西洋とは異なる知の体系をもつ世界として認識され、イスラーム文明没落の原因として歴史変化に対する非寛容的な側面が問題視されてきた（ルイス 2003）。ハンチントン（1998）は、イスラーム文化や社会は西洋文化・社会とは本質的に非友好的で、両者の接触は世界を不安定化させる恐れがあると指摘している。フクヤマ（2005）は、イスラームの独自の道徳律や政治的・社会的正義の教えをもとに体系的なイデオロギーが一部地域で発展した事実に言及しているが、その理念を西洋的な民主主義を終着点とする「歴史」の途上に位置づけている。また、欧米のメディア上では、預言者存命時の統治政体への回帰を目指すイスラーム教徒は「原理主義的」、「後進的」、「無秩序」であると特徴づけられ、「合理的」で「洗練的」とされる西洋文明とは対照的に描写される傾向にある。こうした指摘はイスラームと西洋近代科学は本質的に相容れず、同時に発展することは不可能であるという前提のもと、科学技術が普及する合理的な現代社会においてイスラーム原理・実践の寛容や革新が求められていることを示唆している。

一方で、イスラームと科学知の関係性について、史学的あるいは人類学的観点から、二元論的アプローチとは異なった論点が提示されている。これらは、上記のようにイスラームと科学知を対極的に捉えるより、むしろそれらを両立的で併存的な関係として捉えている。伊東（2007）は、10世紀から11世紀にわたり興隆したアラビア科学<sup>2</sup>およびイスラーム文化による近代西洋科学への貢献について次のように記述している。伊東によれば、イスラーム征服以前の西アジア地域では、厳密な意味での「科学」という学問体系は存在しておらず、イスラーム文化がヘレニズム科学を独自に吸収し発展させゆく過程で、アラビア科学が興隆した

という。その後、このアラビア科学の知識体系が13世紀以降にラテン語へ翻訳され、西洋近代科学の発展の基盤となった（伊東 2007：156-181）。人類学における先行研究としては、ロトファリアン（Lotfalian 2004：15）による、1990年代以降のイスラーム教徒による西洋近代科学に対する解釈の転換に関する研究がある。この研究によれば、1970年代以前のムスリム知識階層は、西洋近代科学を普遍的でいかなる文化的価値も付さない客観的な学問体系であると理解していた。それゆえに、かれらは科学知がもたらすムスリムの信仰・知識体系への影響は限定的であると考え、そのことを問題視することもなかった。しかし、1970年代以降は西洋近代科学を批判的に見直し、その「相対化」や「歴史化」が試みられた。この試みをロトファリアンは「ラディカル・クリティーク（radical critique）」という言葉でとらえ、イスラーム知識体系の基底をなす知識が脱構造的（deconstructive）な力として作用することによる、西洋とは異なった科学技術の発達の可能性を主張する。これらの非二元論的アプローチにより、イスラームの伝統に準ずる科学技術の活用は、必ずしもイスラーム文明の後退を意味するのではなく、むしろ、特定のイスラーム社会の文脈に即しながら科学が発展していることが示された。

しかしながら、伊東やロトファリアンは、国家元首や知識人層など「権力者階級」による科学知へのイスラーム解釈に重点的に着目する傾向がある。かれらの分析は国家や個人レベルにおけるイスラーム解釈に焦点が絞られているため、科学知と併存関係にあるイスラーム的な視座がいかなる社会状況でどのように人々の間で受容、議論されてきたのかという社会文化的背景への思慮に乏しい。そこで本稿では、とくに、現代イランが置かれている社会文化的背景に留意しながら、環境分野における科学技術の発展と環境問題を取り巻くイスラーム議論の動向に着目し、イスラームと科学知の折り合いのあり方について考察する。

筆者は2009年から2016年にかけての間の17ヶ月間、イランの首都、テヘランでフィールド調査を実施し、聞き取り調査、参与観察および資料文献調査を通してデータを収集した。調査対象者はイラン環境庁（Department of the Environment）、環境NGO、環境分野に従事する研究者、大学学部生および大学院生、ジャーナリスト、公園利用者など延べ160人である。また、彼らと筆者とのあいだで交わされたインフォーマルな会話等も記録し、かれらの環境意識の分析に活用した。調査はペルシア語、英語で行った。なお、本稿で提示する調査および議論は、今後、イスラームと科学知の併存的関係性をさらに探究していくための予備研究であることを付記する。

## 2. イランにおける環境問題の現状と対策

### 2.1. 都市大気環境問題

イランにおける環境問題で、近年、政策的議論やメディア上でとりわけ注目を集めているのは都市部における大気汚染である。イラン政府はその主たる原因を、隣国からの砂塵や乗用車から排出される有害大気汚染物質（以下、排出ガスと表記する）であると公表している<sup>3</sup>。1000万人以上の人口を抱えるテヘランでは、朝夕の出勤・退勤時間帯のラッシュ・アワー時は、とくに渋滞が激しく、排出ガスにより形成される褐色のスモッグが確認できるほどである。テヘランのような大都市の高速道路や一般道は低燃費化が進んでいない乗用車やトラックで溢れ、交通渋滞時のアイドリングと相まって、環境汚染の原因となるガスが多量に排出されている。

このような状況を受けて、イランでは地方自治体を中心に様々な大気汚染対策が講じられてきた。まず、市民にとってより直接的で身近に関わる対策として挙げられるのは、交通規制法である。都市部では2004年より「ゾウジョファルド(*zouj o fard*)」と呼ばれる交通法が施行され、都市中心部における乗用車の出入りが制限されている。ペルシア語でゾウジュ、ファルドはそれぞれ偶数と奇数を意味し、ナンバープレートの一連指定番号の最後の桁数に応じて都市中心部への通行が許可される曜日と時間帯が限定されている。そのため、市民が都市部へ移動する際には主にタクシーや公共交通機関を利用する (Saheb 2014)。

上記のような状況をふまえ、イラン政府は公共交通機関の拡充にも力を注いでいる。公共交通機関への大規模な投資は市民に自家用車使用の自制を促しながら、都市全体の排出ガス量を低下させる狙いがある。公共バス路線の充実はその一例といえる。テヘラン市内の幹線道路には、公共バスのための専用レーンが設けられており、そのレーンを走る朱色の大型バスは朝と夜をピークに乗客で溢れかえっている。この大型バスはバス・ラピッド・トランジット (Bus Rapid Transit、以下 BRT と表記) と呼ばれる中国製の低燃費の大型2連節バスで、2008年から使用されている<sup>4</sup>。また、BRT とともに、地下鉄 (テヘラン・メトロ) が市民に広く利用されている。地下鉄整備事業はイスラーム革命 (1979年) 以前に計画が開始されていたが、実現を見たのは1999年であった。テヘラン・メトロはテヘランとその近郊を運行し、2017年10月現在で、7路線が運行している。現在、既存路線の延伸作業とともに、新たな路線の開業が予定されている。

上記のような対策が講じられてきたものの、都市部の大気汚染問題は未だ改善されているとは言い難い。とくに冬場においては、毎年のように大気汚染による

政府機関や学校の閉鎖が相次ぎ、マスクを着用する人々が以前にもまして見られるようになった。都市部における大気汚染は依然として深刻で、市民の日常生活に多大な支障をきたしている。

## 2.2. 水問題

大気汚染とともにメディアで頻繁に取り上げられているのは、水資源と管理に関する問題である。水資源は人々の生活と密接に関わっているため、その賦存量の多寡により国家経営のあり方は大きく左右される。イランで特徴的であるのは、水資源のうち90%は農業用水として使用されている点である。この過度な農業用水としての水資源利用の現状は、長年の米国主導の経済制裁を背景に、経済的に孤立を強いられてきたイランの複雑な農業事情を反映している。国全体の降雨量が少ないイランでは、ダムを中心とした水資源の管理は国の最重要課題の一つであり、ダム管理の不備や降雨の不足によって生じる渇水問題とは常に隣り合わせである。イラン北東部に位置する中東最大の塩湖・ウルミエ湖（Urumia Lake）の枯渇問題はこのことを象徴する惨事として国内メディアで報じられてきた。ウルミエ湖では、同湖へ流入する河川におけるダムの未整備などが原因で、2000年前後より水位の低下が目立ちはじめ、湖底が露出する事態に陥っている。現在では、「湖」の面積はかつての10%にまで縮小したと言われている。また、湖の縮小に伴う二次的弊害として、湖内に含有されていた塩分の堆積が進み近郊地域における健康被害が報告されている<sup>5</sup>。

水不足によって生じる問題は物質面や経済面にとどまらず、国民の文化的生活においても望ましくない影響をあたえている。テヘランから南へ約340km離れたイスファハーンにおける水問題がその一例である。イスファハーンは、かつてサファヴィー朝（1501年-1736年）の都として栄え、その栄華は「世界の半分」（イスファハーンを訪れた者は世界の半分が観られる）と称された。現在もイスファハーンではその当時の建造物を保存しながら都市計画が進められており、その街の壮麗さはイラン国家の栄華の歴史的象徴として現在もイラン人の中で語り継がれている。とくにイスファハーンを中心部を流れるザーヤンデ川は、これらの歴史的建造物を彩る重要な遺産の一部として市民に認知されている。しかし近年このザーヤンデ川が水不足により渇水に見舞われている。こうした状況を受けて、市民は政府の不適切な水管理を指摘し、政府に改善策を求める抗議集会を必要に応じて開催している<sup>6</sup>。このように、水資源は市民生活へ密接に関わり、国内・国際政治に影響を及ぼし、イラン政府にとって不可欠な資源であることがわかる。



### 2.3. 野生動物の生態保全の問題

イランでは、国内に生息する野生動物に関する報道が多く見られる。たとえば、政府メディアはチーター、ヒョウ、ラム、白鳥などイランに生息する希少動植物の生態について報道し、環境保全の必要性和重要性を頻繁に発信している。これらの動物の生息地域では、イラン環境庁 (Department of the Environment) が監視活動にあたり、当該地域をカテゴリー (野生動物保護地域、自然資源保護地域など) に区分して管理をしている。イラン西部から北東部にかけて、アルボズ山脈 (Alborz Mountains) やザグロス山脈 (Zagros Mountains) の周辺地域を中心に環境保全地域が設けられている。また、これらの地域には約25の国立公園が存在する<sup>7</sup>。保全地域に生息する動物は市場価値が高いため、密猟者のターゲットとなりやすい。そのため、パーク・レンジャー (*mohit-e bān*) による密猟者の逮捕や殺傷事件がメディア上で報告されている。

希少動物の中でも、とりわけアジア・チーターはイラン人にとって特別な存在である。アジア・チーターはユネスコより絶滅危惧種として登録されており、現在はイランにおいてのみ生息しているとされる。そのため、チーターを保護するための取り組みは、国家アイデンティティを擁護することにつながると考えられており、国内メディアでも同様の内容を含んだ報道が活発化している。2014年にブラジルで開催されたサッカー・ワールドカップでは、イランサッカー協会とイラン環境保護協会の協力のもと、イラン代表チームのユニフォームにチーターのデザインが初めて採用された。このデザインの採用には、イランにおける絶滅危惧種のシンボルとして、その存在意義を国内外へ発進する意図が込められている<sup>8</sup>。また、チーター保全を掲げる環境 NGO も活動を展開し、その希少性をユニークに発信しながら環境意識の改善を市民へ訴えている (Abe 2012)。すなわち、アジア・チーターは、イランの保全すべき対象動物としてイラン国民の間で認知され始めている。

### 2.4. 特徴と傾向

以下では、イランにおける主な環境問題の現状と諸機関による対策から見えてきた特徴・傾向について総括する。大気汚染問題、水管理問題、野生動物保護問題に共通するのは、「環境」の概念枠組みは科学知に基づいているという点である。すなわち、「環境」は計量的に測定することが可能で、それゆえ、管理が可能な「対象物 (object)」として理解されている。例をに挙げよう。政府による大気汚染対策では、汚染レベルを抑制するために、まず有害大気汚染物質の濃度を測定し、その出自を特定する必要がある。大気汚染の主たる原因を乗用車によ

る排出ガスと査定しているイラン政府は、その数値を市内の区域ごとに算出している。テヘラン市内では、排出ガスを示す電光掲示板が主要な広場に設置され、市民の環境意識の啓蒙にも寄与している。この過程で「環境」が計量化され、改善しうる対象物としての具象化されていく (Mitchell 2002)。このように現出した「環境」像に基づいて、政府および自治体は乗用車の排出ガス基準数値の設定を行ったり、あるいは交通規制などを盛り込んだ都市計画を定めている。この「環境」の数値化・具象化の実践は、水資源の管理においても同様に見られる。環境庁は地域ごとの降雨量や地理的特徴、また人口統計などに関する調査を行い、これらの調査結果に基づいて、ダムの新設計画案を練り、ダム・貯水地の放水量を調整している。そして、動植物保護の実践についても同様の点が指摘できる。保護地域（公園）に生息する動植物の管理を担うことは、それらの動植物にとっての理想的生態環境を数値的に査定し、その理想の生態環境を創出・保存していくことを意味する。すなわち、イラン政府による主要な環境政策は「環境」が科学的に具象化される過程に寄与し、イランに既存する科学知に基づいた概念枠組みを補完する役割を担っていると言える<sup>9</sup>。このことはイランの環境政策において、ウェーバーが提唱した社会の官僚化や合理化が進行していることを示唆するとともに、「環境」の統治をより円滑に進めることも可能にしている (Agrawal 2007)。



写真1 テヘラン市内の風景

出所：筆者撮影

### 3. イスラーム的環境アプローチ

#### 3.1. ハーメネイ師

イラン政府は上述の科学知に基づいた環境政策を推進する一方で、一般市民の環境意識を啓発するため、ボトム・アップ型のアプローチも採用している。イスラーム教義を基底とする環境政策がその一つである。このアプローチは、イスラーム教シーア派の聖典であるクルアーン (*Qur'ān*) とハディース (*Hadith*: 預言者および十二イマームの言行録) から、環境問題啓発に関連させることが可能な

節や逸話を引用しながら市民の道德感覚に訴え、彼らの自発的な環境意識の変化を促すことを目的としている。ボトム・アップ型アプローチの中でも、求心的な役割を担うのが、イランの最高指導者・ハーメネイ師である。ハーメネイ師は、環境問題が蔓延するイランでイスラームが果たしうる役割とりわけ道德的側面について活発に発言している (Khamenei 2015)。たとえば、2015年3月8日、ハーメネイ師は同国の「自然週間」を祝し、イスラームの観点より環境倫理に関する説法をおこなった。この説法では、クルアーンの数節が引用され、以下の3点が強調された。1) 貧富の差に関わらず、すべての人間は健全な環境を護りゆく義務がある。2) 人間には不毛の土地を肥沃にする責任が課されている。3) 2) の活動の際には、人間は自然の営みの調和を乱してはならない。これらの特徴的な点として、社会に内在する不均衡な力関係の見地から環境問題が論じられていることである。具体的には、社会的権力や財力を持つものがそうでないものを利用し、利己的に自然資源を浪費することにより環境問題が生起している、とハーメネイ師は訓戒する。また、自然資源を人間のために利用することは宗教的に正当・義務化されているが、その限度へ配慮した節度ある活動と呼びかけている。説法の結論として、これらの環境に対する責任と節度ある行動・態度は、根元的にイスラーム教義の実践によって培われ、このような教養を伝播していくこと (*farhang-sāzi*) が環境問題への根本的解決策である、と結んでいる。このように、ハーメネイ師は自然資源を利用する経済活動を容認、奨励するとともに、イスラームの実践によって培われうる道德的感性を成熟させていくことこそがその成功の鍵であるとの見解を示している。

この説法が国営メディアを通して国民に発信されたことを考えると、ハーメネイ師によって提唱されたイスラーム的アプローチは国家のプロパガンダの一部として機能しているかもしれない。しかし、この説法の放映はイラン国内における環境問題の深刻さを示すとともに、環境問題という新しい問題に対するイスラーム解釈が現出している兆しであると捉えられる (Abe 2016)。この説法以後、環境庁をはじめとする政府機関やイマーム・ジョメ (*Emam Jomeh*: 金曜礼拝指導者) がイスラーム視座に根差した環境アプローチについて論じる際には、ハーメネイ師によって提示されたこの指針を参照するようになった。このことから、この説法はイランのイスラーム的環境言説に大きく寄与していると考えられる。

### 3.2. ジャヴァディ・アモリ師

ハーメネイ師と並んで、イラン国内で環境分野におけるイスラームの第一人者として認識されているのがアヤットラー・ジャヴァディ・アモリ師 (Ayatollah



Javadi Amoli) である。ジャヴァアディ・アモリ師は、イスラーム教・シーア派の最高位であるマルジャエータグリード (*marja' taqlid*) の称号を有し、著名なイスラーム法学者である。実際、筆者の現地調査中に、複数のインフォーマント(環境庁職員、環境NGOメンバー、書店経営者、新聞記者、一般市民)より、彼の名前を耳にした。彼の著書「イスラームと環境 (*Eslām va Mohit-e Zist*)」は、環境活動家の間でこのテーマに関する指南書として位置づけられている。この著書で考察されている議題は「イスラーム的見地からの自然資源開発に関する助言」、「聖イスラーム法における環境論」、「人間と自然の関係性とその至高性」等で、都市部など特定の環境下で暮らす人間としての役割や義務、日常実践に関する規定がイスラームの見地より詳述されている。

同書の中では、クルアーンやハディースが引用され、環境問題におけるイスラームの道徳観に基づいた実践の環境啓発における貢献が強調されている (Javādi-Āmoli 2009)。一例を挙げよう。彼によれば、環境問題、広くは社会問題の決定的な原因となっているのは、人間の腐敗 (*fesād*) である (2009: 72-77)。腐敗した人間は、人間の本性を直視することができない。このような人間は腐敗しているが故に、自然資源や資本を濫用し、負の連鎖によって、自然破壊や経済格差など様々な社会問題の引き金となっている。他方で、腐敗に陥らない人間は、かつてイスラーム教・シーア派の初代イマーム・アリがそうであったように、利己心の抑制が可能で、山や海などあらゆる自然とは友好関係にあり、自然を濫用したり、社会に不平等をもたらす起因となることはない、と述べている。彼によれば、腐敗の原因は人間自身の中に存在する。それゆえ、正しい環境観を打ち立てる鍵は腐敗に陥らない自己を築くことである、と主張する。このように、ジャヴァアディ・アモリ師は聖典を引用しながら人びとの道徳感覚に訴え、かれらの環境意識の自発的な啓発を試みている。

### 3.3. エブテカール女史

筆者は、これらのイスラーム解釈を基底にした環境アプローチが共有される現場に居合わす機会を得た。2016年3月、テヘラン西部に位置するイラン環境庁の一室で、当時の環境大臣・エブテカール女史とテヘラン州のイマーム・ジョメが同席する環境会議を傍聴した。この会議では、市民の環境意識を高めるにあたり、イマーム・ジョメの役割についての意見交換がなされ、環境庁とイスラーム学者との今後の協力体制が議論されていた。この議論の中でエブテカール女史は、ハーメネイ師とジャヴァアディ・アモリ師の見解に賛同しながら、イマーム・ジョメによる道徳面における貢献について語った。その際、女史は預言者の実娘・ファティ

マの敬称が自然と関わりを持つことの重要性について触れた。女史によれば、ファティマの婚資が水であったことの意義は、物質主義によって失われつつある人間の内面性 (spirituality) の価値をイスラーム信仰者に再認識させるための教訓であるという。婚資の資金をめぐり争いが絶えない現代社会で、人びとの目は「資金」という非内面性、つまり、外面性に傾きがちである。他方で、水が婚資として寄贈されることは、創造物 (水) に対する感謝の心を表すことに等しく、ひとの内面性の豊かさを示す。エブテカール女史は、この内面性と外面性の対比を通して、内面性を重視するイスラーム的環境観を共有した。また、女史の語りの中で、イスラームの世界観では人間の「内世界」と「外世界」は連綿しており、イスラーム道徳によって規定された内面性は、その外面世界 (環境) の諸活動に望ましく反映されるという点が強調されていた。このようにこれまで紹介してきたイスラーム的視座による環境観は、聖典の解釈に基づいた宗教的道德観を通して市民の環境意識を変えることに重きを置いていることがわかる。

イスラーム教義を媒介させた環境倫理は、着実に公共空間に波及している。イランで最も書籍店が密集しているとされるテヘラン大学周辺のエンゲラブ通りの書店群で、筆者は環境関連分野の書籍についての調査を行ってきた。調査を開始した2009年当時は、環境関連書籍といえば、環境科学の入門本が中心で、欧米で出版された翻訳本がその大半を占めていた。しかし、2011年以降から、徐々に入荷される関連書籍に変化が見られた。2009年時には刊行されていなかった、あるいは、入荷されていなかった「イスラームと環境」をテーマに扱った書籍の数が2016年には顕著に増加していたことが確認できた。これらの著者はイラン人イスラーム学者で、その著書はイラン国民へ向けてペルシア語で執筆されている。また、近年は、テヘラン市内を走る高速道路や主要幹線道路にかかる陸橋に掲げられた横断幕からも、宗教的な環境メッセージが発信されている (写真1参照)。

#### 4. 事例研究：植樹の日 (*rūz-e derakhtkārī*)

ここまで、イランにおける環境政策における西洋科学的言説とイスラーム的言説をそれぞれ概観してきた。それぞれの言説は異なるアクターによって、異なる方法で論じられていたように見える。しかし、本節では、「植樹の日」(*rūz-e derakhtkārī*) の植樹イベントを事例に、イラン人環境活動家にとってこれらの知識体系が互いに相容れない関係ではなく、むしろ併存的な関係として捉えられている点について考察する。「植樹の日」は、毎年イラン暦のエスファンド月15日 (西暦の3月第1週に相当) に祝され、その慣例の始まりはイスラーム革命以

前の1970年に遡る<sup>10</sup>。近年は、環境意識の啓発のため、とくにイスラーム法学者がこの植樹行事をイスラーム的概念枠組みから推進している。

この「植樹の日」は、科学知とイスラーム、両方の知識体系において重要な行事として捉えられている。環境科学分野では、渇水地域における植樹活動は乾いた地層へ水分を供給し、潤渇作用を促進するという点において有効であるとされる。他方で、イスラーム伝統においては植樹活動に異なった意義が与えられている。植樹活動は生命の象徴である木へ命を付与する行為に等しく、木を粗雑に扱わないというクルアーンの一節に見合った実践である、というものである

(Khamenei 2015)。以下では、筆者が参与観察した植樹関連行事の様子を記述しながら、科学知とイスラームの関係性を考察していきたい。

2016年3月5日、筆者は「植樹の日」関連行事へ参加した。当日、筆者は知り合いの環境NGOメンバーと共に、テヘラン東部地区より車で30分程離れた丘陵地へ朝9時過ぎに到着した。イベント参加者は、20代から30代の若者が中心であったが、子供連れで参加していた40代や50代の男女も多く見られた。参加者総数はボランティアを含め、およそ70人であった。まず、イベントの冒頭で企画代表者が歓迎の挨拶と当日の流れについての説明を行った。その後、私たち参加者は準備体操をした後、ボランティアの誘導で30分ほどかけて、植樹場所である別の丘陵地へ到着した。企画代表者はその途中、所々で一行を止めて、スピーカーを使いながらイランの環境問題の現状について語った。たとえば、見晴らしの良い丘で立ち止まり、対岸を指差しながら、イスラーム革命前と現在の風景の違いについて次のように述べた。「あの褐色の土地はかつて湖でしたが、残念ながら、ダムの管理不備によって枯渇し、現在の姿になってしまいました。我々が今おこなっているような地道な植樹活動は、この地域の水位回復に貢献し、かつての姿を取り戻すきっかけとなるのです」。別の場所では道沿いに見られる種々の木々に私たちの注意を引いて、「我々はこのような異種の木々が育つことができる環境づくりに力を注いで、イランにおける生物多様性の大切さを訴えています」と語気を強めた。また、ボランティアは、インスタグラム (Instagram) やテレグラム (Telegram) などのSNSを使ってイベント活動を発信するようくりかえし参加者に呼びかけていた。参加者はリラックスした様子ではあったが、真剣にかねらの話に耳を傾けていた。

植樹活動が行われる丘陵地に到着すると、企画代表者が植樹の仕方に関する3ステップ・デモンストレーションをおこなった。最初に50cm四方、深さ60cmほどの植樹用の穴を掘り、次に苗木を培養土で埋めて、最後に足で土を踏み固める。参加者は6人から10人ほどのグループに分かれ、各グループは企画者より苗

木の束、培養土入りの袋、シャベルを受け取った。各グループが10本から15本の苗木を植樹し終えるまでには1時間ほどかかった。参加者の中には、筆者のように初めて植樹イベントへ参加するメンバーもいたが、時間の経過とともに、手際よく植樹できるようになっていく様子がうかがえた。植樹を終えたグループは荷物をまとめ、参加者によっては連絡先リストへ必要情報を記入した後、三々五々に解散していった。

上述のようにイラン最高指導者を含めた宗教界の識者がイスラームの視座より植樹の重要性を強調しているものの、「植樹の日」イベントではこのイスラーム言説にはほとんど言及がなされていなかった。大半の言説は環境科学の知識に依拠し、環境問題を物質的な側面から評価し、その現状を説明しているようであった。たとえば、上述の企画代表者による湖の枯渇に関する説明は、その主たる原因をダム貯水の管理問題として捉え、それらを必ずしもイスラーム的枠組みから捉えてはいなかった。また、筆者と同じ植樹グループのメンバーは、植樹作業中は互いの近況や共通の友人の話題に始終し、特にイベントの意義についての会話をすることはなかった。イスラーム言説を媒介させた特徴的な話がなされていなかったため、筆者は環境問題におけるイスラームの役割について会話を切り出した。それに反応した参加者の一人アフメドは以下のように語った。

「私にとっては、科学とイスラームは互いに相反的な関係には位置づけられていません。私たちは、クルアーンを我々の環境意識を形成していく上での指標であると考えています。クルアーンは人間の権利のみではなく、私たちがきれいな空気と水と土を所有する権利についても明記しています。これらは人間が尊厳をもって生きることと直結しており、クルアーンにおいて大切なテーマです。私たちはこの観点に立って、環境問題など尊厳ある生活の妨げとなる問題の解決に取り組んでおり、環境科学知識の応用をその線上に位置づけています」[2016年3月5日]

この語りは、イベント参加者の視座を科学とイスラームという独立した分析枠組みで捉える傾向にあった筆者の姿勢を考え直させるものであった。アフメドの語りは、科学知にもとづく植樹イベントの参加やイベント運営者の語りへの同意は、イスラーム教義にのっとった環境理解の否定や欠落を意味するのではないことを示唆していた。彼の見解によれば、イスラームと科学知は互いに独立した排他的関係にあるのではなく、むしろ、それらは体系的に同一線上に位置づけられており、併存可能な知識体系として理解されている。すなわち、環境科学で定義

されている物理的で数値化・管理可能な環境（観）は、イスラームの環境観とは同一ではないものの、それらは互いに重なり合い、補完しあう関係にあると言える。同様の発言は、他の植樹イベント参加者からも聞かれた。レザーは、クルアーンは日常的な道徳規範を規定し、その内面的な規範に基づいて環境活動に従事するため、イスラーム教義と科学的アプローチが併存することを特段に問題視はしていないとの認識を示した。このようにクルアーンは彼らの思考や実践の基底となる道徳規範の形成に大きく寄与し、この規範を通じて培われたイスラーム的理解と環境活動を介して伝播する科学知は互いに切り離せない関係にあると考えられる。

更にはイスラームにおける自然観が、イラン人環境活動家の世界観の礎となって、彼らの環境観にも影響をあたえていることも明らかとなった。このこともまた、彼らが環境科学的で物質的な自然観を支持する一方で、イスラーム伝統の中で生じる概念枠組みもまた現存していることを示唆している。イスラームの自然観は、井筒（2013：132-141）が記しているように、自然界の運行は、アッラーの絶対的で圧倒的な存在の「徴」（しるし）、そして、神の恵みとしてムスリムに理解されている。ムスリムにとって、自然は絶妙なバランスで人間の生存のために存在している。そのことは、創造主であるアッラー以外には成し得ない、奇跡的な所業であると解釈されている。上記の通り、このアッラーの神聖性についてはハーメネイ師も言及している。筆者が環境庁の職員（30代女性）へ聞き取り調査を行った際に、彼女は環境保全を推進する意義を次のように話した。アッラーが創造した奇跡の調和（自然）に不具合が生じる原因となるのは、人間の度を越えた活動によるものである。それゆえに、これらの問題は人間自身が解決しなければならない。このコメントは、量的自然観を包含しながら、ハーメネイ師やジャヴァディ・アモリ師、またエブテカール女史によるイスラーム解釈によって提示された、内面的な道徳規範に根ざした環境観とも共通点をもつことが分かる。このように、イスラームと環境科学における「自然」概念の相違は存在するが、こ



写真2 「植樹の日」 イベントの様子

出所：筆者撮影



れらは必ずしも両者の矛盾を意味するものではない。むしろ、イランの人々のなかで環境科学的で物質的な自然観とイスラーム伝統の中で生じる概念枠組みは併存しているのである。

## 5. おわりに

本稿では、イランで環境問題をめぐる西洋近代科学知とイスラームの関係に注目し、その併存性のあり方について検証することを目的とした。分析にあたり、宗教を西洋近代科学と対極的に序列する、二元論的な視座とは批判的に距離を置いて、この分析枠組みでは捉えきれない両者の併存関係について事例を通して考察した。

2節と3節では、それぞれ、環境科学的、イスラーム的な環境問題へのアプローチの特徴について概観し、イランが現在直面している環境問題や環境問題に携わるアクターを多角的に描き出した。「植樹の日」の植樹イベントを事例に参加者が環境活動を西洋科学的でありイスラーム的でもある実践と捉えていることを明らかにした。すなわち、アクターによる環境活動の実践を通して環境の計量的具象化と道徳化が並行しながら進行している点である。

イランでは、この独自の視座に根ざした環境運動が昨今加速している。ある環境NGOは「イスラームと環境」を活動テーマに掲げ、環境科学を教育背景にもつ研究者がイスラーム法学者と共同プロジェクトを立ち上げている<sup>11</sup>。また、環境庁は教育面からも類似したアプローチを奨励している。2017年4月、同庁はシーア派巡礼地の一つであるコム(Qom)に拠点をおく女子宗教学院<sup>12</sup>と教育協定(*tafahom-nāmeḥ*)を締結した。その声明によれば、両者はイスラーム的視座から環境問題を問い直しながら、学生のそれらに対する洞察力を養い、イスラーム的環境観を発信することにより、環境問題を解決する方途を探ることが合意された<sup>13</sup>。これらの活動の今後の動向については、さらなる調査を要するが、注目に値する。

今後、イランにおける環境問題に対するイスラーム的アプローチは、変容を迫られる同国におけるイスラームのアイデンティティの堅持という観点からも今後重要性を増すと考えられ、環境問題の議論を通じて、このアプローチがさらに多岐にわたって展開することが予想される。イスラーム世界における西洋近代科学の発展は環境分野に限らず、生殖医療など他の分野においても顕著であり、本研究は今後の科学知とイスラームの知識体系の折り合いのあり方について示唆を与えるものである。

## 謝辞

本研究は、平成20年度松下幸之助記念財団研究助成、平成27～28年度科学研究費（課題番号15K16898）、平成28～31年度科学研究費（課題番号16H03705）、および平成29～30年度科学研究費（課題番号17K13587）によって可能になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

## 注

- <sup>1</sup> 本稿では、「イスラーム的視点」をイラン人の間で一般的に容認されているイスラーム教義の解釈に根差した視点と定義する。また、「西洋近代科学の視座」を自然を物質的に、そして物質を量的に即してみる量的自然観と定義する。これらの定義の背景知識については、それぞれ Asad (1986) と木田 (2010) を参照されたい。
- <sup>2</sup> 伊東は、アラビア科学を「イスラームによって征服された地域—東は中央アジアから西はスペイン南部、南はアフリカ北部にわたる—において八世紀後半から十五世紀にかけてアラビア語によって文化活動をなした人々の科学」(2007: 157) と定義している。また、アラビア科学をまとめるイスラームが核となる共通項であることを述べている。
- <sup>3</sup> <http://www.ilna.ir/بخش-اجتماعی-536432/5-درصد-آلودگی-هوای-تهران-نانشی-از-تردد-هزار-کامیون-است> (閲覧日2017年9月12日)
- <sup>4</sup> <http://hamshahronline.ir/details/29941/City/city-affairs> (閲覧日2017年10月1日)
- <sup>5</sup> <http://www.irna.ir/fa/News/82686701> (閲覧日2017年10月1日)
- <sup>6</sup> <https://ir.voanews.com/a/iran-isfahan-protest/4064425.html> (閲覧日2018年2月5日)
- <sup>7</sup> <https://fars.doe.ir/Portal/home/?218753/پارک‌های‌ملی> (閲覧日2017年10月1日)
- <sup>8</sup> <https://www.isna.ir/news/95050105172/یوز-جه-فوتبال-ایران-باز-می-گردد> (閲覧日2018年2月5日)
- <sup>9</sup> 測定可能な「環境」が現出する詳細については Abe (2013) を参照されたい。
- <sup>10</sup> <http://article.irna.ir/fa/NewsPrint.aspx?ID=14401> (閲覧日2017年10月5日)
- <sup>11</sup> <http://iqna.ir/fa/news/3566180/افتتاح-اولین-کانون-قرآن-و-محیطزیست> (閲覧日2017年7月5日)
- <sup>12</sup> イラン人女性の宗教教育については、桜井 (2014) を参照されたい。
- <sup>13</sup> <http://www.shia-news.com/fa/news/136166/امضای-تفاهم-نامه-همکاری-حوزه-علمیه-خواران-و-سازمان-محیطزیست> (閲覧日2017年10月5日)

## 参考文献

- Abe, Satoshi. 2016. "Management of the Environment (*mohit-e zist*): An Ethnography of Islam and Environmental Politics in Iran." *Japanese Review of Cultural Anthropology*, vol. 17(1): 63-81.
- Abe, Satoshi. 2013. "Conceptions of Nature in Iran: Science, Nationalism, and Heteroglossia." *Journal of Anthropological Research*, vol. 69 (2): 201-223.
- Abe, Satoshi. 2012. "Iranian Environmentalism: Nationhood, Alternative Natures, and the Materiality of Objects." *Nature and Culture*, vol. 7 (3): 259-284.

- Agrawal, Arun. 2007. *Environmentality: Technologies of Government and the Making of Subjects*. Durham: Duke University Press.
- Asad, Talal. 1986. "The Idea of an Anthropology of Islam." *Occasional Paper Series*. Center for Contemporary Arab Studies, 1-22.
- フクヤマ, フランシス. 2005. 『歴史の終わり〈上〉〈下〉』渡部昇一訳. 三笠書房.
- ハンチントン, サミュエル. 1998. 『文明の衝突』鈴木主税訳. 集英社.
- 伊東俊太郎. 2007. 『近代科学の源流』中公文庫.
- 井筒俊彦. 2013. 『「コーラン」を読む』岩波書店.
- Javādi-Āmoli, Abdollāh. 2009 [1388]. *Eslām va Mohīt-e Zist* (Islam and the Environment). Tehran: Markaz-e Nashr-e Esrā.
- 姜尚中. 2003. 『マックス・ウェバーと近代』岩波書店.
- Khamenei, Ali Sayyed. 2015 [1394]. *Nehzat-e Hefz-e Mohit-e Zist* (Movement of Environmental Protection). Tehran: Enteshārāt-e Enqelāb-e Eslāmī.
- 木田元. 2007. 『反哲学入門』新潮文庫.
- ルイス, バーナード. 2003. 『イスラム世界はなぜ没落したか? 西洋近代と中東』白杵陽監訳. 日本評論社.
- Lotfalian, Mazyar. 2004. *Islam, Technoscientific Identities, and the Culture of Curiosity*. Lanham: University Press of America.
- Mitchell, Timothy. 2002. *Rule of Experts: Egypt, Techno-Politics, Modernity*. Berkeley: University of California Press.
- Parsons, Talcott. 1963. "Introduction" in *The Sociology of Religion*. pp. xxix – lxxvii. Boston: Beacon Press.
- Saheb, Tahereh. 2015. *Air Pollution Governance in Iran: Inhibiting Factors*. Ph.D. diss., Rensselaer Polytechnic Institute.
- 桜井啓子. 2014. 『イランの宗教教育戦略: グローバル化と留学生』山川出版社.
- Tambiah, Stanley J. 1990. *Magic, Science, Religion, and the Scope of Rationality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ウェーバー, マックス. 1936. 『職業としての学問』尾高邦雄訳. 岩波文庫.
- Weber, Max. 1963. *The Sociology of Religion*. Boston: Beacon Press.
- 吉村慎太郎. 2005. 『イラン・イスラーム体制とは何か: 革命・戦争・改革の歴史から』書肆心水.